

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 34: 58-66
Issue date	1895-03-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4541">http://hdl.handle.net/2298/4541</a>
Right	

確なるを打破せんぞ試むれども、其スコットの言へる溶液論こそ最も不確にして、學者間蠶々の問題となるものなれ。要するに、君は曖昧疑訝の、科學の大敵なるを信じて、斯學のため、かつは僕のため、正正否否の勞を取りて、僕がオツクリユジヨンの詞を用ひざるを責あ、以て初學者を惑はす恐ありと爲せり。然れども僕が趣意は、水素のバラケウムに吸収せらるゝは、オツクリユジヨンを爲す者にあらざ、合金をなす者なるべしといふに在り。豈オツクリユジヨンの詞を用ふることをせん。これ江戸見物を爲すに、西に向ふと一般ぢらんのみ。(但し見物者は關西人たること)M、M君よ、乞ふ、今後共に共に此種の問題を研究し、以て斯學のために盡さん。謹言。

## 雜報

### ○有栖川參謀總長宮殿下御薨去

有栖川參謀總長宮殿下は、客臘より御病氣よあらせられ、舞子に於て御養生ありしも、何分御容臑勝れさせ給はず、去月廿四日午前一先つ御歸京遊されしが、藥石其效なく、遂に全日午後御薨去あらせられし。吾人は軍國多事の際、殿下の御病氣を拜承し、一日も早く御快癒あらんことを祈り奉り、之に、圖らずも此悲報に接す。吾人豈に痛歡に堪ゆべけんや。

廿五日午後及び廿六日、吾人は業を休み、謹て哀悼の誠意を表し奉り。廿九日御葬儀執行の當日、亦た業を廢し、遙かに東都の方向に對して御送葬の禮を行ふ。午前九時半職員生徒一同、校西練兵場に整列す。中川學校長先づ一同に告ぐる所あり。曰く、

本日は故參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位功二級職仁親王殿下御葬儀執行の當日なり。思ふに殿下が維新の際より今日に至るまで、終始兵柄を握り給ひ。今上天皇陛下を輔佐し、中興の偉業を扶翼あらせられ、其偉勳大功枚擧に遑あらざるとは、既に諸子の知悉せる所。殿下は明治維新の際には、討幕の大總督として、十年の西南の役には、征討大總督として、而して其後は參謀總長として、軍職に當り籌策畫謀あらせられたり。不幸にして殿下御病氣に罹らせられ、醫藥其効を奏せざ、終に溘然として御長逝遊されたり。陛下の御愁傷、且つは國民の痛歎如何ばかりぞや。我邦今や暴清を征して、連戰連勝、將に威海衛を陥れ、山海關に迫ら

んさす。然れども是れ百里を半にせるもの、前途猶ほ悠遠なり。此時に當りて有栖川宮殿下の御長逝を聞く。遺憾限なしと雖も、我軍隊の忠勇にして英武なる、益々激し、益々奮ひ、終に全く効を成し、果を収め、東洋平和の克復を全ふし、日東の國威を發揚する、將に遠きにあらざる可し、以て庶幾くば殿下の英靈を慰め奉るを得んや。今殿下の御葬儀の時に際し、謹て遙拜の式を行ひ、恭く哀悼の意を表し奉らんさす。諸子之を諒せよ。

一同遙拜の式を行ふ。時に陰雲朦々、將に雨らんとす。天も亦さ悲痛する所あるが如し。式を終て一同退散せり、時に十時十五分なりき。

### ○紀元節及第三回征清軍戰勝祝賀式

二月十一日、例によりて紀元節を祝する式を舉ぐ。午前九時三十分、生徒一同雨天体操場に參集す。正面には菊章ある白幕を打匣、壇上に　聖影を安置し奉り、滿場肅然、寂として咳聲あし。秋月教授進みて　勅語を捧讀せらる、畢りて一同拜賀を行ひ、一齋祝歌を唱へて式終を告ぐ。是に於て、式場は一變して第三回祝捷式を行ふ處とあれり。中川學校長恭しく　聖影の御前に進み、奉賀の文を讀まる。乃ち　天皇陛下萬歲、大日本帝國萬歲、陸海軍萬歲を大呼して式を終ふ。聲は龍田の山を撼え、白川の水を跳らし、天地亦祝意を表するが如し。

#### ●祝捷の宴會

此日午後第三時、職員生徒共會して、宴を白川の湄に張る。威海衛既に陥り、皇軍氣愈振ふ、即ち之を祝せんと欲する也。西川總務立て開會の趣旨を述べ。中に言へるあり。『今日の宴會、肴核頗粗ぞといへども、諸子決して之を咎むる勿む。看よ、彼の萬里遠征の將士は、氷結せる團飯、酸敗せる梅干、以て僅に其枵腹を滿すに非ずや。倘し諸子にえて其辛苦の萬一を想はゞ、盍ぞ此粗肴を以て十二分の歡を盡す能はざる理あらんや』。衆皆喝采湧くが如し、秋月先生起て舞ひ、中川學校長朗吟す。拍手歎呼哄然天に震ふ。飲む者あり、食ふものあり、歌ふものあり、舞ふものあり。午後五時に及びて漸く散會せり。此日風光扇和。

# ○委員臨時改選

某々懲戒事件は某々除名事件を牽起し、某々除名事件は端なくも委員の辭任とあれり。中川會長其願を容れ、二月九日、直ニ規則に據り臨時改選を行はしむ。其結果左の如し。

總務部	西川 文一	古川 豐雄			
雜誌部	村川 堅固(再)	秋月 胤繼(再)	太田 辰一	杉山 富樫(再)	
	十時 彌	小原 之正			
柔道部	松本 喜四雄	久保 惟修(再)			
擊劍部	中津 三省	名尾 良辰			
戶外遊戲部	蟻田 仁策(再)	吉野 五六郎			
弓術部	細田 多次郎(再)	賀來 佐賀太郎			
雜誌部	飯田 御世吉郎	渡邊 斷雄	本田 弘		
柔道部	野口 三九郎				
戶外遊戲部	中島 廉夫				
弓術部	佐野 達				

然るに再選せられたる者、就任し難き事情ありければ、其趣を縷々會長に具申し、會長も特別の詮議を以て今回に限り之を許可せ、十二日規則に従ひ其補欠選舉を行ふ。其結果次の如し。

今回の事件及び其結果に就ては云ふべきあとにあらざるも、今は憚りて之を記さす。

## ○兎 狩

二手は客月三十日午後より翌卅一日にかけて錦野に至り、一手は三十一日未明より西山に向ひ、何れも雄壯活潑ある兎狩を催したり。峯巒を越へ、溪谷を涉り、林叢を潜り、深森を分ち、愉快なる呐喊聲裡、狡兎を追ふて兎網に至らしめ、鉄腕一撃之を斃し、一同手を打て快哉を絶叫す。其快今猶ほ之を想

像し來れば、手舞ひ足踏む感あくんばあらず。其方法の如きは此地方の外に類あらざる所。吾人は四方より來學せる健兒が親しく其狀況を見、他日の談柄となすことの最も妙あるを知る。吾人が今回の兎狩に就て遺憾ありとする所は、幾多の健兒が事に托して此行に加はらざりしことあり。優柔爲すなきが如きは、寧ろ諸氏の爲めに取らざる所あり。

### ○寒稽古終了式

●擊劍部 二月三日午前九時、擊劍部寒稽古終了式あり。先づ委員下山陸治氏開會を報じ、且つ寒稽古の成績を陳べ、次に野田教師と下山氏との形、及び十數番の稽古あり。之を終りて、中川會長は山川端夫、下山陸治、岩井敬太郎、吉野五六郎、松原常典、石橋愛太郎、柴田文平の七氏に、寒稽古無欠席の賞狀を授與せらる。次に秋月部長の演説あり。其要に曰く、

擊劍部が日に月に隆盛に赴き、本年の寒稽古の如きは其成績殊に良好なりき。眞に是れ我校の爲め、はた又我邦の爲に、大に慶賀すべきとなり。望らば諸子、盛に過ぎずして而も盛に、武を練るべし。抑も今日は武藝に偏倚すべき時勢にあらず。苟も社會に事業を爲さん欲する者は、必ずや文學を習得せざる可らず。若し夫れ文學を廢して専ら武藝を事とするが如きとあらば、是れ高等の教育を受ける者の分にあらず。盛に過ぐる勿れと云ふは即ち此理なり。何事も權衡を失はざるを善しとす。文武の權衡宜しきに適ふ、是れ諸子に切望して措かざるなり。

偕我邦は古來武を以て國を建てたりの彼の神器と仰き奉るもの、一は實に寶劍にあらずや。嘗て 先帝の賀茂御行幸を拜觀せしに、侍從寶劍を捧持して扈從し奉りき。先日の有栖川宮殿下の御國葬にも、亦刀劍を列に加へられたりと聞く。廢刀の今日われも、我國民たる者は各自刀劍を蓄へ、因て以て心を練り膽を鍛ひ、尙武の氣象を永遠に傳へんと希望に堪へず。願くは我校率先して此風を起し、全國の高等學校に及ぼし、漸次國民をして之に倣はしめんとす。

之にて式を終り、小豆雜煮を配ち、快談に時を移し、十一時を過ぎて散會せり。

●柔道部 征清の舉にして、遺傳的武士國の新氣運に向ふ兆候たるあらば、寒稽古の舉、亦我柔道部の隆盛に赴く瑞相あらざらんや。柔道部が龍南會の一部として設置せられしより、茲に五星霜。此間日に月に隆盛あるを看るは、實に慶賀すべき所。是れ固より教師其人を得たるの致す所なれど

も、抑も亦た部員諸君の熱心勉強、其度を増せるよりらずんばあらず。

二月十日、寒稽古結了式を行ふ。會さる者二百余名。時辰八時半を過る頃、松本喜四雄氏委員に代りて開會を報じ、結了式の挨拶あり。次に中川會長寒稽古無欠席者に賞狀を授與す。其榮を荷へる者は次の十二名なり。

四級 久保 惟修 五級 友枝 高彦 高月 一郎 岸川 太郎 六級 松原 常典 山本三次郎

七級 岡 本 巖 渡邊愼次郎 上野小十郎 石橋愛太郎 東島權次郎 中川與四郎

又進級者の披露あり。熱心銳意武技を練り心身を鍛ひ、以て此効果を收む。諸氏の得意思ふべし。

多賀義三郎 宮崎 洗馬 友枝 高彦 五十嵐 力 河村 眞儀 田口 晋吉 高月 一郎 相川林三郎

三隅 稟藏 岸川 太郎

右六級より五級へ

藤村 守美 中島 廉夫 小原 之正 仲村 幾夫 河野司馬三 徳永 秀雄 南里 猷一 吉田 護

右七級より六級へ

次に野口三九郎、友枝高彦兩氏の講道館投の形、及び久保惟修、池田泰親兩氏の起倒流表及び裏の形あり。何れも一通の出來ありき。元來形は柔道の骨格あれど、兎角儀式的に流れ易きものなれば、尙一層精練の程こそ望ましかれ。夫より乱取十數組ありしが、皆平常に異り、何れも力を用ゆることなく、柔道の眞面目を表はせり。平常もかくありたきものあり。之にて式を終り、鏡開に移り、十二時頃散會せり。

又次の月次勝負の際、進級せられたる諸氏の姓名、當時の紙上に洩れたまはば、今之を左に掲ぐべし。

池田 泰親 有働 眞夫 野口三九郎

右五級より四級へ

井尻 松雄 木本 正一 原道 太 鵜野 忠一

右六級より五級へ

岡田 岩藏 太田 辰一 谷川 宣智 富田 太郎 古賀 英 永淵助二郎 松本敬太郎 齊藤照二郎

多賀義三郎 五十嵐 力 山本三次郎 橋本 徳壽 本間 義一 三 橋 保  
右七級より六級へ 部員 英 周 生 投

## ○弓術部競射會

二月十七日、當日は臨時委員改撰後の初會なり。委員新任の披露と共に、新工風の競射行はれたり。開會は豫期の如く午下一點鐘、出席者は部長部員合せて十二名なりき。案外會員の少數ありきは、新任委員に對して少々御氣の毒なりし。此日風寒かゞしも、申分なき晴天ありし爲め、部員の足頭は急に方向變換せしものと見えたり。又是非もなき次第なり。聴て二時と覺はし頃、百二十個の銀杏の實は委員の宝箱より取出され、各員に等分せられたり（食ふも非す）。此等は各員の所有する財産にして、豫め規約を定め、當矢の數に應じて（種々の場合あり）命中者に仕拂ふの資に供する者あり。三立の終は於て、各自の財産を檢するに、大に富の不公平を生し、與ふる所有て曾て得る所をかりし者は多くは破産を免れず。斯くして各得る所の多寡に従ひ、茶菓と交換せらる。其得る所多き者は笑み、空しき者は顰す。先に顰する者今笑ひ、忽にして富み、忽にして貧す。實に一顰一笑は貧富の映鏡と知られたり。却て都合三回の勝負ありし内、第一回の財産家は一名（所得二十個）にして、破産者なく、第二回の財産家は二名（同三十三個）にして、破産者四名、第三回の財産家は一名（同二十三個）にして、破産家は五名ありき。次て日清軍組分の競射となり、前後六回の勝負ありし内、第一回と第二回は勝敗なく、第三回より第六回迄は悉く日軍の勝利に歸し、清軍は連戦連敗、遂に白旗を樹てざるを得ざるに至る（龍も敗軍の一將、思合はすれば前夜夢見か悪かりき）。日軍常に精銳の士を出せり（殊に部長と佐賀の健兒は氣焰を吐きたり）、其勝を制するや宜あり。嗚呼日清干戈を交へしより、皇軍の勢破竹の如く、連戦連勝四百餘州向ふ處に敵なき、何ぞ其れ快あるや。當日の競射に於ても亦暗に之と符合せり、豈吉祥と謂はざるを得んや。新任委員諸君、乞ふ顧慮することを止めよ、今後弓術部の隆盛は蓋し吉祥にて卜知するを得ん。諸君幸に努力せよ。弦を收むる時察鐘五點を報す。弓術部々員龍投

## ○近時片々

●陸叙 中川學校長は高等官三等に、賀來教授及び笠間教授は高等官七等に、何れも陸叙せられたり。

●有馬教授の轉任 今般有馬教授は大坂府堺第二尋常中學校長に轉任せられ、先月下浣赴任に途に就かれたり。茲に送別の意を表し、併てその健全を祈る。

●永井助教授 は先月十二日門司を發し、十五日大連灣に着、暫時碇船の後、威海衛に向はれたり。又嘗て我校に在りし肝屬菊次郎氏も、亦た軍に従ひて戰地に在り。頃日書を家園に寄せて、二月六日の戰況を報しと云。

備さに辛苦を嘗め、死生の間を出入し、氣愈壯に、勢益猛し。遙かに其健在を祈る。

●自炊紀念日 二月十五日は正に第四回自炊紀念の日に當れり。此日食堂には幾多の松樹を飾り付け、又壁上詩句を掲げ、質素の間に十分に祝意を寓し、和氣堂に滿つ。三食皆を珍味佳肴を供へ、宛ら習學寮の正月の狀ありき。前幹事椿先生に膳を供へて、其創業に於ける功勞を紀念し、又中川學校長、櫻井教授、舍監等を招待して饗する所ありき。

●職員の移動 羽生講師は教授に任じ、高等官七等に叙せられ。三池助教授は召集を解られ。矢津野上兩氏は願に依り雇を解られ。鈴木達治伊津野直兩氏は雇申付られ。岡野氏は体操副科柔道掛を、和田氏は擊劍掛を、吉村太郎野田長三郎兩氏は雇申付体操副科に助手を、何れも任命ありたり。

●生徒の移動 木下參一、伊藤五郎、村本武の三氏は休學を許可せられ。丸山茂、藤本鶴治、魚住厚吉の三氏は退學を許可せられ。光町三郎治(第四へ)、中嶋琢磨(大村尋中へ)の兩氏は轉學を許可せられた。

●訃音 法科二年梶原高治氏は病を以て郷里高知に歸省療養中ありしが、醫藥其効を奏せず、去る七日逝去せられ。又舊二清水定喜氏は病氣にて休學中なりしが、療養其驗なく、終に去月廿三日を以



て長逝せられたり。當今國事多端の際、有望の英才を懷て、空く黃泉不歸の客とある。痛恨何ぞ堪えん。謹て哀悼の意を表す。

●遺族救恤 本校小使西森、大降、武藤の三名は、第一充員徵集に應じ出軍せしが、其家情誠に憐じべく、老親妻子飢餓に瀕す。是に於てか、衆皆金を捐て之を救恤し、以て出征者をして後顧の患あからしめたり。彼等之を聞く日は、鼓氣一番邦家に報ゆる所あるなるべし。

### ○東京支部通信

拜啓御會益御盛運遙ろに慶賀仕候。當支部も今や在帝國大學生及高等學校其他各官私立學校生合せて百有餘名の多きに及び、勉學傍ら集會、龍南の餘勇を養ひ、步武整々進行の都合に御坐候間御休神被下度候。却説、從來龍南會員にして上京の人は可成繼相付け度精神に御座候處、大學以外にある人は未だ龍南會東京支部存在の事を承知なき向も有之、又之を知るも其居處を詳にせざる等にて、自然會合に漏候おとも不少候間、自今會員の上京する者は可成當支部へ通知し、定時の支部會へ出席出來候様致度、就ては御校在學會員諸君一般に、東京支部存立のことを御披露被下度、又上京後在校々名及宿所を、當分の内高等師範學校構内嘉納治五郎氏へ報知可相成様御注意被下度候。過る一月十九日、上野韻松亭に於て龍南會東京支部會相催申候。其概況左に申述候

明治廿八年一月十九日、第十二回龍南會東京支部會を上野韻松亭に開く。午後五時參集、會する者五十八名。式末た開かず樂座相交りて談笑甚た壯快なり。衆意氣張り、氣焔堂に滔る。六時三十分席を定め、當番幹事開會の辭を陳し、引續き二三の會務を提起す。

一、在獨逸伯林會員文學士大瀨甚太郎氏へ音信の件。

一、第一高等學校に當番幹事一名を置く件。

一、大學以外支部會員の位置不確定に付、龍南會本部へ打合の件。

一、爾後毎回會員中より兩三名を選び談話をなす件。

提議悉く通過し會務了る後、酒を置きて宴に移る。六十名の壯士能く食して能く飲す。さなきだに抑へ兼ねんとする意氣是に至りて滿堂爲に破れんとする勢あり。某々の武骨なる歌舞、某々の瀟灑なる狂言、某々の明快壯絶する詩吟、偕に意外なる人の歌舞な

ど、續々出て満場恰も泉の湧く如し。九時嘉納氏入來あり、他に約ありて遅刻せられしなり。是に至りて會場更に新生面を開き、興益加ふる中に某々兩勇あり、腕前甚奇警、其場の上るや衆歡呼せざるを。午後十時に至り閉會。此日矢津潮田兩氏故ありて不參、衆少しく之を遺憾とせり。

東京支部當番幹事報

○攔筆乃辭

生等不肖誤て會員諸氏の推選を辱ふし、雜誌編輯の任に在りしこと、玆に十閱月。此間の經歷を回想すれば、淺學不才、材器諸氏の囑望に副はず、此有望多事ある本學年に於て、我部の進歩を阻遏したること果して幾何あるやを知らず。慚愧何を堪えん。幸に諸氏の指教に依りて今日に至れり。生等深く諸氏に謝する所あくんばあらず。生等今や故ありて委員の任を辭せざるを得ず。然れども六俊才生等に代りて其任に就かれたれば、來月以後の雜誌は、必ず光彩陸離たるものあらん。聊か一言を記し、以て攔筆の辭とあす。

明治廿八年二月中浣

村川	堅固	秋月	胤繼	水月	哲英
高木	敏雄	杉山	富鶴	江口	俊博